

Aqoursと俺の日常

墮天使フェブリ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

A q o u r s 9 人と俺（深井祐輔）の日常のお話。

目次

はじまり	1	やっぱりヨハネ	59
ルビイとお出かけ その1	6	高海千歌誕生祭2020 千歌の夢	
ルビイとお出かけ その2	11	66	
私たちがだつて!	20	桜内梨子誕生祭2020 梨子のした	
ようちか	31	いこと	73
俺とAqoursの出会い	37	黒澤ルビイ誕生祭2020 いつか遠	
AZALEAさんは…	44	くへ	83
ダイヤさんのしてほしいこと	49		
千歌の気持ち	55		
番外編			
津島善子誕生祭2020 ヨハネは			

はじまり

「1, 2, 3, 4 1, 2, 3, 4」

夏の空に曜の声が響き渡る。

「ルビィちゃん、そのステップ遅れてるよ」

「はい!」

「じゃあ、今のところもう一度やってみよっか」

~~~~~

「じゃあ、休憩にしよ」

千歌のその声を聞き、俺はクーラーボックスからペットボトルを取り出し、

「おい、まずは水を取りに来いよ。倒れられると大変だからさ。」

と、メンバーに声をかける。

「あつ、ゆーくんありがとう」

「ゆう君、ありがとうであります!」

曜はビシッと敬礼しながら言った。

「祐輔さん、無理なお願いをして申し訳ないですわ。」

「いいんだ、俺はA q o o r sのみんなのことが好きでやっているから」

そう、俺はA q o o r sのマネージャーをやっている。こうなつた経緯はまた別の機会に話すとしよう。それはいいんだがなんでかダイヤが顔を赤らめている。

「どうしたダイヤ？熱でもあるのか？」

「いいえ、だいじょうぶですわ。ただ……」

（いきなり好きと言われても困ってしまいますわ／＼）

「おーい、ダイヤ、どうした？」

「なんでもないですわ！」

強く言われて驚く俺だが、大丈夫ならまあよしとしようと考えた。

「そろそろ練習再開しよっか」

と、千歌が言ったが、

「その前に、みんな1000円だして！」

果南が声を出した。

初めはなにを言っているのか理解できなかったが、すぐに分かった。

ルビイが、「アイス！」とかわいい声をあげたからだ。

「じゃあ、じゃんけんで買いに行く人を決めよっか。」

俺がこう持ち出す。

「「「「「賛成！」「」」「」」「」」

「墮天のパワーを我に！」

「どうやら賛成のようだ、一人変なことを言ってるやつもいるようだが。負けた人が全員のアイスを買に行くことでOKな？」

ジャンケン ポン！

勝敗は1発でついたんだが、えっと、その、、、

「俺の負け！！」

「じゃあ、そうゆうことで祐輔ヨロシク〜」

鞠莉が追い打ちをかけるように言ってくる

「しょうがないから、行くかあ〜」

と、俺はコンビニまで買いに行った。

お会計の時一人だけ高いものを頼んできたやつがいて、後で請求してやろうと思うのであった。

〜15分後〜

「買ってきたぞ〜」

俺の一声でみんなが集まってくる。

俺を中心に円を描いているかんじだ。

密集しているからか、暑い。とにかく暑い。

あと、いい具合に発達した女子高生が9人もいるわけだから俺の理性が持たない。何とかしてここを脱したいのであった。

すると、梨子が何かを察したのか

「ここだと暑いから図書室に行こう」

と提案した。

俺は梨子のおことが女神に見えたが、あえては口に出さないことにした。

「ずらあ〜」

「ピギイ〜」

「ヨハあ〜」

「ちよつと1年生組さん方、扇風機にあたれないんですけど」



返事がない。こりや言っても無駄だわ。  
そう思いつつアリスを堪能していた。

しばらくしてルビィが

「ゆうくん、ちよつといい？」

と俺のことを呼びに来たのであった。

## ルビィとお出かけ その1

ふああゝねみいゝと、文句をつける俺。

だつてまだ朝7時半ですよ。

7時半で眠いとは何事だ！という方もいるかもしれないが、しょうがないんです。だつてゲームに夢中になって気づいたら深夜3時だつたんですもん。

いやあ最近のソシヤゲーはすごいですなあ。

とは言え8時になったらルビィが家に来るので急がなくては……

何故ルビィが来るかって？こんなことがあつたんです。

ゝ昨日ゝ

「ゆうくん、ちよつといい？」

「おうどうした？」

「えつと、その……」

「……だど話しづらいからちよつとこつち来て！」

俺は状況がつかめてなく混乱していた。こんなに強気のルビイは見たことない。言われるがままについていく。見た感じ楽しそうだ。

人目に触れないところについたらいきなり

「あ、あのね、あした一日あいてる？ゆうくと遊びに行きたいの。」

といってきた。正直俺は驚いたが、ルビイの気持ち汲んでOKすることにした。

「いいけど、俺でいいのか？ほら、善子とか花丸とかいるじゃんか。」

「ううん、ゆうくとがいいの／＼」

「それならいいけど、じゃあ明日の朝8時に家の前で待ってるからな。あと、そろそろ練習に戻るぞ。」

(ピギィ、ゆうくと2人きりで、デート／＼)

「ルビイ、なんかいったか？」

「ううん、何でもないよ／＼」

そうは言うが顔が赤い気がする。熱でもあるんだろうか。

~~~~~

ざっくり言ってこんな感じである。ってこんなことしてる暇はない、いそがないと！と、あたふたしていたら

ピンポン♪

どうやらルビィが来たようだ。俺は急いで身支度を終わらせて玄関へ向かった。家のドアを開けた瞬間に俺は固まってしまった。

そこにはフリルのあるワンピースにライトブルーの靴を履いたルビィがいた。何とも言えない小動物感がかわいさを一層引き立てている。可愛い、死にそう。

「……くん！ゆうくん！」

「おはよう、ルビィ。どうかしたのか？」

「どうかしたってゆうくんのことを呼んでも返事がないから心配になっちゃって。

もしかして、ルビィとお出かけいやだったの？」

ルビィは半泣きになっている。

どうしようかとあたふたしていたら、

「ルビィが可愛すぎて見とれてた」

ついこんなことを言ってしまった。やべえ、何てことを言ってしまったんだ。と、こんなことを考えていたら、いきなりルビイが抱きついてきた。

「えへへ／＼頑張って選んできた甲斐があった」

上目使いで言ってきた可愛すぎて耐えれなかったので頭をなでた。

「ところで今日はどこにいきたいの？」

俺はふと思ひ聞いてみた。そういや、どこに行くのか知らなかったわ。

「沼津駅のほうに行つてシヨツピングとかしたい！」

やっぱり女の子はシヨツピングだね。

それなら…と俺は時計を確認した。やっぱりだ。もうバスが来てしまう。

「ルビイ、もうバスが来ちゃうよ。急がないと。」

そう言つてバスに乗つて沼津駅に向かう俺ら2人であった。

バスの中でルビイが俺の方に頭を乗せて寝ていたのは言うまでもない。

くルビイSideく

今日はゆうくんととの2人きりのお出かけ♡

頭もなでもらえたし／／／
A q o u r s のみんなにとられないようにいっぱいあまえようつと。

ルビイとお出かけ その2

バスに乗ってなんやかんや1時間くらい。俺ら2人はようやく沼津駅に着こうとしているところだ。

が、相変わらずルビイは肩に頭を乗せ気持ちよさそうに寝ている。

寝顔が可愛いから起こしたくないなあ……

なんて考えていたらルビイが目を覚ましたらしい。

「んん…あつ、ゆうくん…おはよう」

本日2度目の硬直を決める俺。可愛すぎだろ。

まあ、こんなことがありつつも何とか理性を保ちつつ沼津駅に到着した。

「まず、どこから行きたいの？ やっぱりショッピングセンターか？」

と聞く俺だったが、

ぐうぐう

腹の虫が鳴ってしまった。そーういや朝飯食ってなかったわ。

恥ずかしい……／＼

「ふふつ、じゃあ、近くの喫茶店でも入ろっ！」

カランカラン♪

「いらっしやいませえ、お二人様はカップルでございましょうか。それでしたらあちらの席になりますけど……」

おいおい待てよ。いきなり男女2人だからってカップルかどうか聞く店なんかあるか？ましてや俺とルビィはそんな関係でもないし……

「いえいえ、そんなカップルとかっていうかんげ……」

俺はこう言おうとしたが、かぶせるようにルビイがこう言った。

「わ、私たちはつ、付き合ってます！」

「ふふふ、それならこちらの席になりまあす。カップル2名様ご来店でえくす！」

……………ha? ちよいままでえええええ！ 無念にも俺の声は届かなかつた。

~~~~~

「ゆうくんなに頼む？」

「そのパスタにしようかな。」

「じゃあ、おんなじやつ！」

そんなことでおんなじパスタが2皿きた。外見も中身も全く同じものですよ。

「おつ、ここのパスタ美味しいな」

「そうでしょうこのお店ルビイのお気に入りなの！」

そんな他愛もない話をしていたがルビイがフォークを差し出してきた。

「いや、おんなじやつじゃん」

「いいから、とにかくいいから!」

ルビィが引き下がらないから俺は食べた。うん、変わらず美味しい。

「ルビィにしてもらったから、はい」

今度は俺がフオークを差し出した。

するとルビィは

「ピギィ／＼／＼」

と、顔を赤くしつつもパクつと食べた。

自分からするのは良くて、人からされることについては慣れていないんだろうか。

くくく

「ふうくおなかいっぱいだね。そろそろ買物いこつか」

時計を見ると11時ちよつと過ぎを指していた。

「何か買いたいものはある?」

「新しいアクセサリーを見たいな」

てなわけでアクセサリーショップに向かった

「可愛い〜」

ルビイはくぎ付けになっていた。

「なんかいいもの見つかったか？」

うん、と答えるもののそれはちよつと高めのもので

「欲しいけど、高くて買えないや〜」

としよんぼりしていた。

でも、俺の持ち合わせ的にもちよつとまずかったのでどうすることもできなかった。

すると店員さんが

「お兄さん、ちよつといいですか。」

とやってきた。俺ら2人は訳が分からなかったが、とりあえずルビイにこの辺で待つておくように伝え、店員さんについていった。

俺はルビイの姿が見えなくなる場所まで移動してきた。

「お兄さん、あのネックレス、彼女さんにお似合いですよ。」

それは重々分かつている。でも……

「それはわかるんですが、金銭的にちよつと不安なんですよね。」

「それなら、値引きしますよ。彼女さんにプレゼントしてあげてください。」

あつさりと言ってきた。そんな簡単に値引きしていいものなのかよ。

と、思いつつも買うことにした。

ついでお会計の時にきれいにラッピングしてもらい、ルビィのところへ戻った。

喜んでくれるといいなあ

「あつ、ゆうくんおかえり〜何してたの?」

「ちよつと店員さんと話してただけだよ」

本当のことを言うわけにはいかない。

「それより、なんか買うものは決めたのか?」

「うん、この髪留めを買うことにしたの。」

見た感じピンクが基調のものようだ。しかし、ダークブルーと黄色を基調とした同

じょうなものも持っている。

「同じやつを3つも買うのか？」

「うん、善子ちゃんと花丸ちゃんとお揃いにしようと思つて。」

善子はお団子の部分につけるとして、(変かもしれないが)花丸つて髪を結んでいたわけ？まあ、細かいことは置いておこう。

しばらくしてお会計を済ませたルビイが戻ってきた。

「次はどこに行こうか？」

その後は洋服屋に行ったり、手芸屋さんに行ったりして時間を過ごした。

~~~~~

もう日が傾き始める時間帯になり始めていた。

今日は晴れていて見通しもよいため、最後にびゅうおに行くことにした。思っていた通り、富士山がくつきりと見え、西日で輝いていた。

俺はこのタイミングだと思い、ライトブルーに包装された小さな箱を取り出した。

「ほい、ルビィ、プレゼントだ」

初めは処理が追い付いてなく何のことか理解できていないようだった。

「ル、ルビィに？」

「おう、そうだ。開けてみな」

「こ、これはお昼に買おうとして諦めたネックレスだ！これルビィにくれるの？一生の宝物にするね！」

と言ってすぐにつけてくれた。

可愛い。やっぱり可愛い。

しばらく2人でぼーっとしていた。

びゅうおから出て内浦に向かう帰りのバスを待っていたところ、

「ゆうくん、あ、あの、手つないでくれない？」
とルビィが声をかけてきた。

私たちだって!

「手、つないでもいい?」

俺は、この言葉に戸惑ったが

「ほい」

と右手を差し出した。

ぴよこん、とルビイが飛びついてきて満足そうに手を握っていた。

可愛い。

そのまま俺らはバスに乗って帰ったのであった。

内浦に着くころにはすっぴかり日は沈み暗くなっていた。俺は、ルビイになんかあつては困ると思い、家まで一緒に行くことにした。

ルビイの家に行くと中ならダイヤさんが出てきた。

「祐輔さん、今日は1日ありがとうございました。」

「いえいえ、こつちも楽しませてもらっちゃったし。」

「ルビイ、その首についているネックレスは何ですか？」

「これね、ゆうくんを買ってもらったの！いいでしょ」

「……ぞとばかりに見せつけている。」

「そんなうらやましいなんて思いませんわ！」

強気になっているダイヤさん。

「ダイヤさんも欲しければ買ってあげるよ。」

「祐輔さんがどうしてもって言うなら……」

感情をうまく表に出せないダイヤさんもまた可愛いのであった。

↳数日後↳

A q o u r s の練習が終わったあと、千歌に呼び出された。

「ゆうくん、帰らないでちょっと待ってて！あつ、曜ちゃんすっかり見張っててね。」

「了解であります！」

俺なんかしたっけか。思い付く節はルビイとのお出かけぐらいだけど、これを知っているのはダイヤさんくらいしかないはず。

「ねーねーゆうくん。ちよつと前に1日家にいなかった日があつたけど何してたの?」

千歌が聞いてきた。見事に予想は的中したようだ。

「いや、ただ1人で買い物に行っていただけだよ。」

「ふーん、ならこの写真はなになか?」

と言つて、曜はスマホを見せてきた。そこにはルビイとパスタを食べさせあつている写真が写つていた。

正直人生終わったと思ひましたね。もう白状するしかないと感じ、俺はあの日にあつたことを洗いざらい話すことにしましたよ。

さすがにネットクレスの件はやめておいたけど。

「ふーん、じゃあ、あの日ゆうくんは1日中ルビイちゃんとデートしていたわけだね。」

「まあ、そうだな。間違つてはいない。」

「じゃあ、今日ゆうくんの家に泊まりに行くね！」

なんでそうなる。

「いやあ、言っていることが理解しかねますな。どういうことでしょうか？」
とぼけて逃げようとしたが、無駄だった。

「言ってるそのままでよ〜」

ようちかの2人がやろうとしていることは分かるが、高校生になった女の子を家に入れてさらに宿泊をさせるのは抵抗感がある。

「悪いけど無理だな。」

「え〜〜〜ゆうくんのけちんぼ！」

千歌はぶーぶー文句をつけている一方で曜は何か思いついたのかニヤニヤしている。

「そんなにだめならこの写真をA q o u r sのメッセージグループに送っちゃおうかなあ〜?」

「……………わかった、泊まりに来ていいから。それだけはやめてください。お願いですから。」

「じゃあ、OKってことで!学校終わったらすぐ行くから!」

はあ、まあいつか。

早く帰んなきゃいけないのに、帰り際に先生に

「深井くちよつとこれ手伝ってくれ〜この学校に男子はお前しかいないからさ〜」
と呼び出されてしまった。

男子が俺しかいないのには深いわけがある。

100字以内で説明すると

少子化が進み生徒数が減った浦女は男女共学にしようと思改革を始めた。その実験として男子一人が入学することになったのだが、俺のかあさんと理事長（鞠莉）の母が知り合いつてことで俺が入学することになった。

こんな感じである。

言つた通り男子は俺だけなので、何にもないときは男性教師陣と昼飯を食べる。だからなのか、めっちゃ仲がいい。

くくくく

帰るのが遅れたため家に着いた時には曜がもういた。

「ゆうくんおそい〜」

「ごめんごめん、それより千歌は？」

「千歌ちゃんも旅館の手伝いで遅くなるって、21時ぐらいだと思う。」

「ふーん、そうなんだ。」

（つていうことは…ゆうくんとしばらく二人つきり／＼／＼）

「曜どうかしたか? 顔が赤いぞ。」

「い、いやなんでもないよ／＼」

その顔は絶対に何かあるだろ。

「そーいや、曜は夕飯どうするの?」

「特に決めてないけど……逆にゆうくんは?」

「俺は適当にコンビニで済ませるつもりだけど」

こーう答えたら、曜が俺に近寄ってきて(あと10センチで顔がくつつくんですけど)

「それじゃだめだよ! それなら私が作ってあげるから!」

と言ってきた。

「作ってくれるのか。ありがとう、それなら任せるな。」

く曜Sideく

ど、ど、どうしよう……見え張って作るなんて言っちゃった／＼
でも千歌ちゃんもないし、これはチャンスかも!!

男は胃袋でつかみ取れって言うし、頑張らなくっちゃ！

メニューは……

そんなに気張らずいつも通りヨキソバにしようつと。

く曜日 Side Out く

俺は、曜にゆっくりしててと言われたけど、なんか申し訳なく思い、作っていると見にいって。どうやら、焼きそばみたいなものを作っているようだ。

「曜、怪我だけはするなよ。スクールアイドルは体が基本だからな。」

「うん……ありがと／＼／」

しばらくして完成したらしく、要はお皿を持ってきた。

焼きそばの上に乗っている薄焼き卵には『YOU』とケチャップで書かれていた。

「おお〜！美味そう！曜、ありがとな。」

「えへへ／＼曜日ちゃん特製ヨキソバであります！」

それじゃあ、いただきます。

といきたいところだったが、曜が箸を持ってニコニコしている。

「自分で食べられるのでいいです。」

「ルビィちゃんとはやったのに〜?」

それを言われてしまうと断れない。

「はい、あーん／＼どう?おいしい?」

曜に食べさせてもらったので、お返しに曜に食べさせてあげることにした。

「なにポカンと口を半開きになっているの?お返しだよ。」

「あつ、そうなの!! モグモグ 我ながら美味しいであります!」

(ゆうくん間接キスだよ／＼気づいてないの?)

曜さん、なんで顔が真っ赤なんでしょうか。

くくくく

俺はしばらくして、ずっと引つ掛かっていたことを聞いてみた。

「そういえばさ、ルビイとのあの写真どうやってとったの？」

どうやら、

高飛び込みの練習の帰りに喫茶店に寄ろうとしたのだが、その時に窓際に座っている俺らを見つけたらしい。こっちに気づく心配がなかったため、写真だけ撮って家に帰った。羨ましかったそうだ。

ツツコミポイントはいっぱいあるが、いちいち反応しているときりがないためやめておいた。

曜曰く、ルビイばかりじゃなくてこっちにも向いてほしいといっている。

く曜Sideく

あの日、とても羨ましかったんだからね！ルビイちゃんばっかりずるいよ。
だから……だから今日はゆうくんを独り占めするんだから／／

千歌ちゃんと一緒にね。私以外の女の子に興味がいかないように……!

あつ、千歌ちゃんが来たみたい!

ようちか

千歌ちゃんが来たみたい！

「うわーん、遅くなっちゃった〜」

「あつ千歌。お疲れ〜」

「お疲れ〜とかそんな気楽なもんじゃないよ。だって…」

ぶーぶー文句言ってるよ。

「ようちか両方そろったけど、なにすんの？」

そう、これが俺にとって一番気になっていたことだ。

「ゆうくんを独り占め！」

口をそろえて2人が言った。

……………ん？

2人いる時点で、独り占めってことは矛盾していると思うのですが…………

「とりあえず2人でお風呂はいつてくるね」

千歌がいった。

ほんつと自由人だなこいつら。

でもやつと1人の時間になったあああ！ゆつくりできる！

「ようちかSide お風呂にて」

「なんかゆーくん、私たちに対してそっけなくない？」

「そうかなあ？」

「だって、泊まりに行くって言ったとき初めは拒否したんだよ。」

「そりやそうでしょうよ。世間一般からみたら相当勇気がある（いろいろな意味で）こ
とじゃないですか。」

「でも、好きな人の前では思っていることと逆の行動をするって前聞いたよ？」

「考えが安直っていいことですね。」

「じゃあ、ゆうくんは千歌のことが好きってことだね！」

「違うよ、わたしだよ！」

「どっちが先にゆうくんを振り向けられるか競争だね！」

どこで張り合っているんですか。

くようちかSide Outく

ようちかが上がってきたので、次に風呂に入った。

風呂の水が滅茶苦茶減ってて驚きましたとき。

風呂から出て、ようちかとゆっくりしていたら日付が変わろうとしていた。

寝ようと思うのだが、1つ問題が発生した。

布団がこの家には2つしかないということだ。

元々来客用に1つ多く置いてあったのだが、2人も泊まるなんて予想外すぎた。

……ようちかは幼馴染だし、一緒にやつでいいよね。

「んじゃ、俺はこっちで寝るから2人はそっちで寝てくれ。」

「えっ？一緒に寝るんだよー！」

そう言つて曜は2つの布団をくつつけた。

「じゃあ、寝よっか。ニコニコ」

そう言つて曜は右の布団に入った。

千歌は…というと、俺の手を引いて一緒に布団にはいろうとしている。

抵抗したら寝れないと感じたので諦めた。

簡単に今の構図を説明すると左から、千歌、俺、曜ってかんじだ。ちなみに俺は、布団と布団の間に横渡っているんで、体が痛い。

ついでに、ようちかがすごく体を密着させていて、女の子特有の甘い香りがしてくる。

「分かった、手あげるからこれで勘弁してくれ！」

そういって、手を差し出すと気持ちよさそうに2人は寝てくれた。

すつごく手を抱きしめているが。

そのため、俺はぜんぜん寝れず、日の出の時間ぐらいにやっと寝つけた。

よかつたよ、ショートスリーパーで。

くくくく

次の日にようちかが、梨子ちゃんに自慢したため、
「じゃあ、きょうはわたしがいく！」

ってことになってしまったが、梨子ちゃんは限度をわきまえてくれたため、そんなに
苦しくはなかった。

俺とAqoursの出会い

それは俺が中学3年生のときのこと。

俺は高校の進路に迷っていた。

俺は体操競技で全国大会に出場したため、様々な高校から推薦がきていた。でも、もう体操に興味はなく普通の高校生活を送りたかった。

そんな時、母が1つのことを持ち掛けてきたのだ。

「あんだ、テスト生になる気はない？」

「テスト生？なにそれおいしいの？」

どうやら、母さんの友達の娘さんが理事長を務めている女子高があるらしく、その学校が少子化による生徒数減少のため、共学化をしようとしているらしい。

それで、テスト的に男子を入学させたいらしく俺の床に話が来ていると。

ちなみに学費はタダで、ついでに返さなくていい奨学金ももらえるらしい。

こんないい話はないと思い、俺は快く承諾した。

そんなわけで『浦の星女学院』に入学したのである。

実家は東京のため、もちろん一人暮らしで自由な生活を満喫していた。

学校では、成績は常に首席で先生から絶大な信頼を得ていた。そのためなのか、学校での会議には俺が同席していた。

理事長の意向らしいのだが……

この学校大丈夫か？

そんなことがありつつも、1年生が終わり、2年生の春が過ぎた。

6月の半ばくらいだった覚えがあるが……

昼休みにいきなり全校放送で

「2年生の深井祐輔さん、至急生徒会室まで来てください。繰り返します……」

って生徒会長（後にそれがダイヤさんだと分かるが）に呼ばれた。
俺なんかしたっけ？ ってめっちゃびびったなあ

く生徒会室にて

失礼します。

入ると、そこにはダイヤさんがいた。

「忙しい中、呼び出してしまって申し訳ありません。そこに座ってくださいな。」

「いえいえ、とんでもないです。それよりどうして俺はここに？」

代々網本の娘だからかとてもしつかりしているようで、こつちが緊張してしまう。

「あなたを呼び出したのはあるお願いをしたいからなのです。」

お願い？ よくわからんけどとりあえず話を聞くだけ聞いてみよう。

「今年、浦の星にスクールアイドル部ができたのはご存じです？」

「いえ、知らないです。」

女子しかいない学校で部活に入るのは無理な話である。つまり、興味なんてないってことだ。

「それで、そのスクールアイドル部と俺に何が関係あるのです?」

「その、あなたに顧問もとい、マネージャーになっていただきたいのです。」

「……………は? いや、先生とかいるじゃんか。」

「それはそうですけど…その…」

先生はほかの部活でいっぱい足りなく、相談したら俺がいるってことになったらしい。成績優秀だからいいんじゃないって。

どういうことだよ。成績だけでこんなことになる世の中でしたっけ。

「少し考える時間をください。」

「それでしたら、放課後屋上で活動していますのでよかったですら見に来てください。」

~~~~~

放課後、俺は生徒会長に言われた通り屋上に向かった。

「こんにちは」

その声で9人の少女たちが振り返った。  
ある一人を除いてほとんどが状況を理解できていないよう硬直していた。

「あら、来てくださったんですね。」

「ダイヤさん、その人は誰なの？」

「チカツチくその男性はきつとダイヤの彼氏よ！」

金髪の子が急に言いだした。

「「「「「か、かれし!!」「「「「「」」」」」」」」

「お姉ちゃん、いつの間にそんな、彼氏を……」

「ダイヤさん、まるは羨ましいすら。」

「つていうか、金髪の子って理事長じゃなかったか？」

「それなら、状況は分かっているはずだが……」

「鞠莉さんく？何を仰っているのです？」

「ソーリー、イツツジョーク！」

「みんな、よく聞いて！あの方はね…」

理事長がかくかくしかじか説明してくれた。

「つまり、Aqoursのマネージャーってことだね。」

「でも、本人の了承って得たの？」

アホ毛のあることワインレッドの髪のおとなしそうな子が話していた。

「どうします？あなたに決める権限はあるんですよ。」

生徒会長にそう聞かれたが、俺の答えはもう決まっていた。

「OKだ。引き受けることにするよ。」

「本当にいいのですか？」

「だって家にもやることないし。」

~~~~~

そんな経緯で俺はマネージャーになったのだった。
なんか何人かは異常に盛り上がっていたような……
まあいつか。

AZALEAさんは...

今日もいつも通り学校に向かったが、普段と何かが違う。

集合時間になっても部室には花丸、ダイヤ、果南もといAZALEAの3人がいなかった。

「3人そろって遅刻か？」

「そんなわけではないじゃん。」

鞠莉が言った。

「そうだよなく善子とか千歌じゃないんだからなく」

「なんかそこはかたなく馬鹿にされているような気がする…」

「とはいうものの、私たちもなんで来ていないのかわからないのよね。」

「どうしたのかしら。」

梨子と曜がこんなことを話していた。

「そうなのかい!!」

俺は心配になって探しに行くことにした。

ルビイ曰く、沼津港のほうに行ったのとか。

とりあえず、ダイヤさんに電話してみた。

「ダイヤさん、約束の時間を過ぎてるがなんかあったか？」

「いえ、そのちよつといろいろありまして。」

「無事ならそれでいいが、連絡してくれよ。」

「申し訳ありません、気を付けますわ。それですね……」

「わかったそれなら協力するよ。とりあえず6人で練習始めているよ。」

電話を切るとすぐに

「ゆーくん、ダイヤさんと最後何話してたの？」

「特に千歌には関係ないことだ。」

「ダイヤさん、抜け駆けはだめであります!」

「そうよ!」

抜け駆けつてなんだよ。

「とりあえず、練習するぞー」

「「「「はーい」」」」」

~~~~~

屋上でいつも通り、練習をしているがやつぱり6人だと物足りなく感じる。それと締まりが悪い。ダイヤさんがいたほうがいい意味でいいようだ。

そんなことを考えていたらAZALEAの3人がやってきた。

「遅れてごめんずら〜」

花丸はいつも通りだったが、ダイヤさんと果南の機嫌が悪いような気がする

「2人とも何かあつ…」

と、言いかけたが電話口で言われたことを思い出し、発言を慎んだ。

「マルは本屋さんでの買物が長引いちやって…ついさっきこの2人とあったぞら。」  
どうやら花丸と2人は別行動だったようだ。  
よかった…とだっていいかもしれない。

「じゃあ、9人そろったし、練習始めよつか。」

「「「「「「「はーい」「」「」「」」

ダイヤさんと果南はさっきのあの機嫌の悪さはなんだったんだっていうくらい普通に会話している。

…だが、どうも何かが引っ掛かる。

ダイヤさんのあんな顔を見たことがなかったからだ。

でも今は、みんなのこのほうが重要だ。東海地区予選も迫っていて、より一層練習に力が入っているのが感じられる。

その反面、不安の感情も持っていた。

なぜなら、ラブライブ本選への出場校は会場の投票とインターネットでの投票により決まるからだ。

浦の星は圧倒的に生徒数が少なく不利である。

そのハンデを千歌達9人はどうするのか俺にはまったく分からなかった。

## ダイヤさんのしてほしいこと

今日はA q o u r sの練習はないが、学校に行く。

その理由は昨日の電話でのことだ。

~~~~~

「それですね、1つお願いがあるのですが…」

「できる範囲で、俺は協力するよ。」

「生徒会の仕事を手伝ってほしいのです。」

意外と単純だった。

「いいけど、それならいつも果南や鞠莉が手伝ってくれているじゃん。」

「ええ、そうですが…あまり、迷惑をかけたくないのですわ。それと、このことはほかの誰にも言わないようにしていただきたいのです。」

「OKだ、誰にも言わないよ。」

「ありがとうございます。明日8時に生徒会室に来てください。では♡」

普段見ることができないダイヤさんの一面を見れると思いい、内心嬉しかった。

~~~~~

生徒会室に行くともうダイヤさんがいた。

「おはよう、遅くなつて悪い。」

「おはようございます、祐輔さん。私が早く来ただけですから、気にしないでください。」

「そうか、で、俺は何を手伝えればいいんだ?」

「それではその書類の仕分けをお願いします。私はこちらで会議に出す書類を作っていますので。」

そう言つてダイヤさんは作業に取り掛かつていた。

俺も見習つて自分のことを始めた。

会話をして楽しく?作業していたが、しばらくしてダイヤさんが静かなことに気づいた。

そちらを見ると気持ちよさそうに寝ている。

何ともその寝顔が可愛らしく、見とれてしまつていた。ついだに寝言まで言つてい

る。  
可愛い。

でもそのままではまずいと思い、起こすことにした。

「おーいダイヤ、大丈夫かー おーい」

思いのほか、すぐに起きた。ちよつと残念なような気もしたが。

「私としたことが……それでなんで呼び捨てなのですか？」

おつ、気付くとは鋭いな。

「だって寝言で『呼び捨てで呼んでほしいですわ。』って言ってたじゃん。」

ダイヤはしばらく考えていたが、意味が理解できたのか顔を真っ赤にして俯いてしまった。

「嫌だったら元のように『さん』付けに戻すけど、どうする？」

「いえ、このままで結構ですわ。ですが……」

（いきなり呼び捨てで呼ばれると少し恥ずかしいですわ／＼）

この後しばらく俺は、ダイヤをからかって遊んでいた。

結局そのせいで午前中はほとんど仕事が片付かなかつた。

とりあえず昼休憩をはさんで午後もダイヤの手伝いをするようになった。その中で俺は疑問に思っていたことを聞いてみた。

「そーいや、なんで今日は俺に手伝いを頼んだんだ？いつもは果南とか鞠莉なのに。」  
「それはですね……一つ相談したいことがあるからですわ。」

それは俺も悩んでいた東海地区予選のことだった。

前にも言ったが、ラブライブ本選への出場校は会場での投票とインターネットでの投票により決まる。つまり生徒数が少ないのは圧倒的なハンデになってしまう。

続けてダイヤは言った。

「生徒数のハンデをなくす方法は一応あるのですが、あまりにもリスクが高すぎて……」

どうやらそれをやったために昔、鞠莉が怪我をしてしまったらしい。

それでもやらないと勝てないから鞠莉とダイヤはやる意向らしい。

一方で果南は絶対にやりたくない。



昨日もこのことで言い争っていたらしい。  
どおりで機嫌が悪かったわけだ。

「実際には私たちがやるのではなく千歌さんがやるので祐輔さんにサポートをお願いしたいのです。」

そうすれば果南の納得も得られるかもしれないという。

俺はあまりにも漠然過ぎたので聞いてみた。

「千歌のサポートはできるけど、具体的に何をするんだ？」

ダイヤは一息ついてこう言った。

「バク転ですわ。」

……………ん!!

「そのままですよ、驚かないでください。」

「いや、まあ分かるけど、本気でやるのか？」

体操をやっていた俺から言わせると、こんな短い期間でできるようなことではない。ましてや、やるのは千歌である。心配しかない。

「私は少なくとも本気ですわ。これしかないと思っっていますから。」

「……………分かったよ。俺が千歌のことは見るから。」

「ありがとうございます。それでは、よろしくお願いしますね。」

その日の夜、何とか果南の了承を得られたようだ。

鞠莉が海に飛び込んだらしいが。

何があっただ。

しかし、課題が1つある。千歌のやる気の問題だ。バク転は生半可な気持ちではできないし、危険を伴う。

千歌はどう考えているのか、明日聞いてみよう。

# 千歌の気持ち

ダイヤの手伝いをした日の夜、千歌は Saint Snowの聖良さんに電話をして  
いた。

やっぱり、東海地区予選のことだった。

聖良さんもダイヤと同じような考えで、他のチームがやらないようなことをやって観客の目を引くしかないと考えていたようだ。

梨子は千歌のそばを通りかかったが、その会話を聞いて動揺したのか何も千歌に話しかけることなく去ってしまった。

　　次の日学校にて

「ねえ、Aqoursらしさってなんだろう？」

突然千歌がこんなことを言い出した。

「「「「「「Aqoursらしさ?」「「「「「」」」」」」」」

「うん、昨日聖良さんと話して分かったの。今のままじゃ勝てない。私たちがしさを  
出さないといけないって。」

「なるほど、A q o u r sらしいさね……果南、あれを出したらどう?」

「でも……」

果南はためらっているような様子だったが、

「果南さん、私たちは9人もいるのですよ。ここは千歌さんに任せましょう。」

「そうよ、果南!」

「なんの話? ダイヤさん!」

千歌はとても目を輝かせている。

「これは昔私たちがA q o u r sが3人だった時に勝つためにやろうとしたフォーメー  
ションですわ。」

「なんでそんなに消極的なの? やろうよ!」

果南は千歌たちの熱意に負けて諦めたのかノートを千歌に手渡したが

「私が危ないと判断したら、すぐに辞めさせるからね。」

と、言い残した。おれもその考えには納得できた。

「じゃあ、千歌は練習終わったら残ってくれ。」

「うん…分かったよ。」

「あのさ…」「私たちも一緒に残ってもいい？」

曜と梨子が言い出した。流石に心配になったのだろう。

「いいけど、面白いことなんてなんもないぞ。」

それだけ言い残し、練習に入った

くくくく

練習後、1年生と3年生は既に帰っていた。

梨子と曜は心配そうに千歌のことを見ている。

「初めに俺から1つだけ言わせてくれ。これは興味本位で簡単にできるものではない。また、考えが甘く怪我をした人をたくさん見てきた。それでもやる覚悟があるのなら、俺は精一杯のことはするつもりだ。どうする、千歌？」

流石に、俺がここまで強く言ったから足が震えていたが、目の色で心情を感じ取れた。

「わたし、やって見せる！Aquoursと学校、それと私自身のために！」

「千歌ならそう言うと思ってた。ここにポイントをまとめたノートがあるからしっかり読んでおくように。それと曜と梨子、ちよつと頼まれてほしいことができた。」

「私たちに!!」

「そうだ、2人にしかできないことがある」

そう言うのと2人の暗かった顔が明るくなり、笑顔になっていった。

2年生3人で力を合わせないとこの壁は乗り越えられない。

俺はそう思ったのだった。

## 番外編

## 津島善子誕生祭2020 ヨハネはやつぱりヨハネ

そういや、今日ってヨハネの誕生日じゃん。

時間は深夜1時過ぎだったから、迷惑にならないようにメールで送った。

「善子、誕生日おめでとう！何かしたいことってある？1つだけかなえてあげるよ。」  
こいつ結構太っ腹ですね、何でもする”って。

すると30秒も経たずに返信が来た。

「いますぐ我の家にきなさい。」

……いや、無理だわ。時間を考えろ、時間を。

「じゃあ、10時くらいに行くね。」

「しようがないわね、妥協してあげるわ。」

案外チヨロイな。

そんなわけで俺は寝た。

~~~~~

俺は、善子の家に行く前に彼女に似合うような、ネックレスを買っていった。

家に着くと、門の前で善子が待っていた。

「もう、祐輔遅いわよ！」

「ごめんな善子。ちよつと買物してたもんで。」

「だからヨ・ハ・ネ！」

家に入って儀式をやるかと思いきや、どうやらホラゲーの実況をするようだ。

確か、善子って怖いものは苦手だったはずだが……

とりあえずPCとかカメラのセットを手伝い、配信が始まった。

始まって5分も経たないうちに

「ぎやあああ！なんか顔のないやつがこっちに来るううう！」

「いやあああ！」

などとわめきまくっていた。

いやいやホラゲーってこういうもんじゃなかったっけ？

こんなんではびるのは……な。

配信が終わると善子は涙目になっていた。

善子の素顔って間近で見ると可愛いんだよな。

しかし、このまま放っておくわけにもいかないのだから俺はとりあえずクレープ屋さん
連れていくことにした。

道中は終始俺の右腕に引っ付いたままで、その、なんていうか、柔らかいものが当たっ
ていた。理性が持たなくなるからやめてほしい。

「ほら、善子何食べる？奢るから、遠慮するなよ」

「うう、じゃあこれにする／＼」

生クリームとフルーツいっぱいのかレープにしたようだ。

「ん〜おいひい〜」

どうやら満足したようで、結構な勢いで食べている。

「ほら、鼻にクリームがついてるぞ」

人差し指でクリームを取ってあげるとぱくつと指をくわえてきた。

「んん、おいしい♡」

どうやら機嫌も直ってきたみたいで、よかった。

俺は、ここだ！と思い、小さな箱を取り出して善子に渡した。

「善子、誕生日おめでとう！プレゼントだ。」

「へっ!! わ、わたしに? あ、ありがとう。開けてもいい?」
「おう、いいよ。」

善子は、箱を開ける。

「わああ、きれいなネックレス。ありがとう!」

ハグッ／／／

善子が抱き着いてきた。公共の目に触れるところでどうかと思つたが、気持ちを汲んであげることにし、頭をなでてあげた。善子は再び泣いちゃつてるし。

「ありがとう……ありがとう……グスッ」

2人は、しばらくのあいだ、余韻に浸っていたのであった。

その後はゲーセンに行つて楽しんだ。

本調子になった善子が波に乗ったのか、俺は連敗に連敗を重ねた。
ついでに1日なんでも言うことを聞くという罰ゲームを与えられてしまった。
いや、善子強すぎねえか？あと、罰ゲームキツすぎだろ。

くくくく

気づけばもう夕方になっていた。

「んじゃ、そろそろ時間だから、帰るね。」

「あつ、祐輔ちよつと待って……」

「こつち見てほしいな／＼／」

チュツ／＼

「へっ!!」

「今日は、ありがとう!最高の誕生日だったわ。」

と言い残し、走って帰ってしまった。

後からメールで、あげたネックレスをつけた写真が送られてきた。

気に入ってくれたようだ。

次に会ったときに善子と微妙な空気になり他のメンバーから怪しまれたことは言うまでもない。

高海千歌誕生祭2020 千歌の夢

今日は、8月1日。

わたし、高海千歌の誕生日です！

今日1日は家の旅館の手伝いをしなくていいっていわれたんだ。
だから、ゆーくと遊ぼうと思います！

あつ、携帯が鳴ってる。誰からだろう？

どうやら、ゆーくんからみたい。ちょうどよかった！

くくく

「もしもし千歌か？」

「ゆーくんおはよう。どうしたの？」

「今日、千歌の誕生日だろ。なんか1つ願いを叶えてあげようかなあつて思ってた。」

「……じゃあ1日千歌と一緒にいてほしいな／＼」

「そんなことでいいの？OKだ。」

「家の前の砂浜で待っているからね」

私の1日はハッピーになりそうです！

くくく

しばらくしてゆーくんが来た。

「千歌、おはよー。そして誕生日おめでとう！」

「ありがとう！それでね、今日は沼津駅のほうに行こうと思います！」

「いきなりだな。それはいいんだけど、さっきバス行っちゃったぞ」

……えっ!! 待たないといけないのおく

「じゃあ、いっぱいお話してきるね！」

ゆーくんとはこんなお話をしたの！

|| || || || ||

千歌には夢があります。

1つは、Aqoursの名前を広めて、学校を救うこと！

それもあるけど、一番の夢は……

私たちだけの『輝き』をみつけること！

μ☒sに憧れてはじめたスクールアイドル。

まだまだ未熟な部分ばかりで、失敗もたくさんするけど……

みんながいるから千歌は幸せです！

|| || || ||

「でも、ゆうくんにはずっとずっと千歌の側にいてほしいな。」

「おう、ずっと近くにいるって約束する。」

ふえ☒／／いま、『ずっと』って言ったよね／／

それはそういう解釈でいいんだよね？

「…いい千歌、千歌さぁん？」

「どっ、どうしたの？」

「バス来ちゃいますけど？」

「えええ！急がないと！」

「そんなに慌てなくても間に合うのだが…」

落ち着くんだ、私、高海千歌！

でもまあ、好きな人からこんなこと言われたら気が動転しちやいますよね。
それでは、舞台は沼津駅のほうに移ります。

「千歌、ここで残念なお知らせがひとつ」

「またまた、残念なんて大げさなこと言っちゃって〜」

「実は、千歌への誕生日プレゼントを買っていないのです。」

……え？

しばらく沈黙が続いたが、それを千歌が引き裂いた。

「ゆーくんにとって千歌はその程度の存在だったんだね、善子ちゃんにはプレゼントがあつて千歌にはない、つまり善子ちゃんのが好きなんだね、好きでもない…わたし

といたってつまらないよね、ゆうくんなんかごめん……ね、なん……か悪い……から今日はもう……その……帰るね……」

「わたし、……わたし悲し……いよ」

そのとき、温かい何かに私はつつまれた。それは、ゆうくんだった。

「ごめんな、千歌。驚かせちゃったな、反省してる。」

「でも、プレゼントがないことは変わらないでしょ！」

「……よく聞いてくれ。実はな……」

千歌の誕生日プレゼントを選ぼうといういろいろな店を回ったけど、結局決められなくて明日千歌本人に決めてもらうことにしたらしい。わたしは、ゆうくんが買ってくれたものなら何でも大切に、するのに……

「そういうことなら早く言つてよ……」

わたし、大泣きしてる。みつともないな。

「ごめんな、早くその涙を止めて。可愛い顔が台無しになっちゃうからさ。」

……うん。

改めて思ったの。やっぱりわたし、ゆうくんのことが好きなんだって。

そのあとは、2人で買い物したり、ご飯食べたりして楽しい時間を過ごしたの。しつかり、プレゼントも買ってもらったし！一生の宝物にするんだ！

~~~~~

内浦に帰ってきて朝、話していたところに戻ってきた。

「今日はありがとう！とつても楽しかったよ！」

「ところで約束って覚えてる？」

「約束って……ずっと千歌の側にいることだろう？」

「覚えていたんだね。約束だからね！」

「これだけ言って、ゆうくんと私はそれぞれ家に帰っていった。

そう、私、高海千歌の夢は、ずっとゆうくと一緒にいることです！  
いつか、もっと近づけるようになれたらいいな。

# 桜内梨子誕生祭2020 梨子のしたいこと

これは9月17日の話である。

9月19日

この日は、梨子の誕生日である。

何かしてあげたいと思い、梨子がしたいことを考えてみた。

そういえば、梨子って「壁クイ」とか「百合」とか

いわゆる同人誌が好きだったような……

(ここにこういうのを書いて規制とかに引つ掛からないかが心配である。by作者)

ええっと、そういう系のものが充実しているのは…池袋！

という訳で、梨子の誕生日には一緒に東京へ行くことにした。

そうとなれば、梨子に電話しないと！

「もしもし梨子？今、時間大丈夫か？」

「ええ、もう寝るだけだったから大丈夫よ。」

「今度の土曜日さ、東京に行かない？」

「……………へ!?と、東京？」

「うん、ほら梨子って壁クイとかそういうの好きだろ？だから一緒に見に行こうかなって」

「……………へえ!?それは……………」

「冗談だつて。それでも梨子を東京に連れていきたい理由があるから電話したんだよ。」

そう、俺にはどうしても梨子と行きたい場所があった。

勘のいい人なら分かるだろう。

「私と……………一緒に行きたい場所？」

「うん、梨子とじゃなければ行けない。どうする？」

「行く！（祐輔さんと2人きりで過ごせるから／／／）」

「じゃあ、また土曜日にね！」

時は戻って9月19日の朝

俺と梨子は東京駅で待ち合わせになっている。

というのも、俺は9月18日に東京に行かなくてはならない用があったからだ。それはまた気分が乗ったら別の機会に話そうと思います。

時間はまだ朝8時である。

にもかかわらず、俺はもう待ち合わせ場所にいる。梨子からもうすぐ着くと連絡が入ったからだった。

早すぎだろ。おかげで朝飯食べられなかったわ。

しばらくして、梨子が来た。

「祐輔くん、おはよう。待たせちゃった？」

「いや、俺もちょうど来たところだから。こんなところで話しているのもあれだから、とりあ

え、え、行こっか。」

流石は東京といったところか。沼津とは桁違いなほど人がいる。ついでに連休初日もあつてかたたくさんの観光客らしき人たちもいる。

俺は梨子とはぐれてはまずいと思い、手を握った。

何故かは分からなかったが、大丈夫かと思うほど手が熱かった…

「梨子Side」

今日は祐輔さんと東京でデートです！

連れていきたいところがあるって言ってたけど、どこなんだろう？

気合い入れて5時台の電車に乗っちゃったけど…大丈夫かな？

今日は1日楽しんでいこうと思います！

ついでに私の想いを伝えられたらいいな／／

「梨子Side Out」



とりあえず2人とも朝食を摂っていなかったのだから「池袋」のカフェで食べることにした。まあ何というか梨子が可愛くて、それだけでおなががいっぱいになりそうでした。

(うまく形容するのであれば、スクスタのフェス限梨子みたいな感じかなん)

店を出た後は梨子についていくがままに同人誌の店に入っていきましたね。

俺は、こういうものは範囲外だったので物珍しきに見入っていました。

しばらくして梨子を見ると1冊の本をもって固まっていた。

「もしかして、こういうのやってほしいのか？」

ふざけ半分で言っただけでもりだったのに……

「ふえ!! やつてくれるの? こういうのやられてみたくて……初めてが祐輔くんだったらうれしいな／＼」

「え? 梨子の願いならやってあげてもいいけど……」

流石に引き下がれなくなりました。っていうかそんなに好きだったのかいな。

「へえええええ!!!」

梨子が茹でダコみたいになってしまったのでとりあえず、店から出ることにした。

く  
く  
く  
く

そのあとは、原宿やお台場などいわゆる「定番スポット」を回っていった。梨子は楽しそうで、満足してくれたようだ。俺としてはうれしいばかりだ。

時間ももう16時を過ぎていた。

でも、どうしても行きたいところがあつたためお願いして時間を作ってもらつた。

それは、国立音ノ木坂学院。

俺たちは正門前にいた。

「どうしてここに……?」

「この学校って梨子の転校前の学校なんですよ?」

「それはそうだけど……」

「ほら、改めてピアノと向き直したいって内浦に引越してきて、千歌たちに進められるがままにスクールアイドルつてものを始めて。」

「梨子も千歌から聞いただろ。自分の好きなものを大切にしてほしい、ピアノを大切にしてほしいって。」

「千歌ちゃんたちのおかげで私は、ピアノに向き直すことができた。それが今の A q o u r s の活動にも生きてきているね。」

「それで、思ったんだ。梨子つてこの学校のピアノを弾きたいんじゃないのかって」  
梨子ははっとしていた。

「それと何かここに置いてきているものがある感じが俺にはするんだ。」

「うん……わたしも改めてこのピアノを弾いて心残りだったものを音に乗せたい！」

すでに梨子は涙ぐんでいた。

ユメノトビラ ずっと探し続けた

君と僕とのつながりを探してた

Yes! 自分を信じてみんなを信じて

明日が待つてるんだよ 行かなくちや

Yes! 予感の星たち胸に降ってきた

輝け…迷いながら立ち上がるよ

疲れた時に僕を励ます 君の笑顔は最高

そして少しずつ進むんだね

ときめきへの鍵はここにあるさ

ユメノトビラ 誰もが探してるよ

出会いの意味を見つけないと願ってる

ユメノトビラ ずっと探し続けて

君と僕とで旅立ったあの季節

梨子はピアノアレンジをして弾き語ってくれた。

俺は美しい音色に聴き入っていた。

「何かつかむことができた?」

「ええ、ここに置いてきた何かを、うまく言葉にはできないけど。」

「それは良かった。ここに連れてきて正解だったよ」

と言いつ終わらないうちに梨子が泣きながら抱き着いてきた。

「ありがとう…ありがとう…私一人だったら絶対ここに来ることはなかった。祐輔くんがいたからできたこともたくさんあったし…。これからも私のそばにいてくれますか?」

「おう！もちろんだ、約束するよ」

くくくく

さすがに梨子がこんな状況だったので家まで一緒に帰った。

この週末は連日東京で予定があるが、梨子の為ならしやうがないと思うのであった。ちなみにこの後、日付が変わる前に弾丸で東京に戻ったのであった。

く 梨子 Side く

改めて音ノ木坂にきて、ピアノを弾くことができ、嬉しかったです！

祐輔くんのおかげで一生忘れない誕生日になりました！

うまく私の想いは伝えられなかったけど、

いつかは…

## 黒澤ルビイ誕生祭2020 　いつか遠くへ

時は遡って9月17日

明後日は梨子の誕生日だった。

その話について詳しくは前回をご覧ください。

それはそうと9月21日はルビイの誕生日である。

しかし、あいにくなことに俺はその日、東京にいたのであった。

でもルビイといっしょに居てあげたい。

迷っていたところに、1本に電話が入った。

「もしもし？あ、あの、黒澤ルビイです！」

「ルビイか？こんな時間にどうしたの？」

「あのね、ルビイの誕生日の21日に一緒にゆうくんと東京に行きたいなあって。」

東京か、ちょうどよかったと思い、

「いいよ、一緒に行こうな」

と、言ってしまった。

この時はあのことには気づいていなかった。

「ありがとう！じゃあまたね、楽しみ！」

とだけ言つて、ルビイは電話を切ってしまった。

この後、俺は予定を整理するために、一回書き起こすことにした。

18日

放課後、東京に行き用事を済ませる。

19日

梨子と東京観光、梨子がある場所に連れていく

20日、22日

ある人たちとの用事を済ませる

(ここについてはまたどこかで話そうと思います)

21日

ルビイと東京観光(行先はルビイ次第)

ざっくりとこんな感じだが、俺はある疑問を持った。

ルビイは1人で東京に来れるのかどうかっていうことだ。



前に、みんなとしか行ったことがないって言っていたような…

~~~~~

次の日の昼休み、生徒会室に足を運んだ。

「失礼します、会長のダイヤさんはいますかあ？」

「あら、祐輔さんどうしましたの？もしかして…／＼」

「ちよいと相談したいことがあって」

「相談ですの？可能な範囲でお手伝いしますわ」

「次の月曜日にルビイと東京で遊ぶ約束をしたんだよ。」

「ルビイと2人で？！わたくしとはやらないのですか？」

「いまにも怒りそうな雰囲気だったのですかさず、

「いや、誕生日だから！ダイヤの誕生日の時には2人きりで何かしますから！」

「約束ですわよ！それでその何が問題ですの？」

「俺、この4連休用事があつてずっと東京にいるんだ。ルビイって1人で東京に行ったことがないだろ。それでどうしようかって。」

「そうですわね…わたくし、ちょうど21日に東京に行く用がかりまして、一緒に行くこ

とにしますわ。」

「それは助かる。また後日なんかお返しを考えておくよ。でも、ルビイには東京に行く理由について追及はほしないうでほしい。」

「わかりましたわ。」

「それじゃあ、頼んだぞ」

何とかかなりそうで肩をおろした俺であった。

~~~~~

そして9月21日

ダイヤさんによると9時半くらいに着くようだ。

梨子の時よりゆっくりにな時間でよかった：

しばらくしてやってきたのはルビイだけだった。

「おねえちゃん品川で降りたよ！だからここまでは1人で来たんだ！」

「すごいじゃん！」

と言いつつ頭を撫でてやった。

うゆゆ〜って言ってる。マジ天使。可愛い。

(語彙力どこ行った)

とりあえず、ルビイが行きたい！って言ってた神田明神へ。

「この階段競争しようよ」

えらく元気だな、もう結構上にいるし。

上に着くとそれぞれがお参りをした。

その間に、俺は絵馬を買い、あるお願いを書いてつるした。

「なんて書いていたの？」

「A q o u r s がまたここに帰ってこれたらわかるよ」

「ええ、教えてくれてもいいじゃん」

こんな時間が永遠に続いたらいいのにと思ってしまったのであった。

その後は一番行ききたがっていたアキバのスクールアイドルショップへ。

やっぱり全国的に有名なスクールアイドルのグッズがたくさんあり、その中にA q o u r s のものもあった。

ルビイはそのことに気づいていないようで他のものに見入っていたのであった。

ひと段落着いたところで俺はある質問をしていた。

「なんでルビィはスクールアイドルになったの？」

「おねえちゃんの影響が大きいかな。昔から2人でA—RISEとかμsの真似をして遊んでいたの。だから高校生になったらやってみたいくて。」

「でも、私には勇気がなくて。そんな時に背中を押してくれたのが花丸ちゃんだったの。」

「花丸が？意外だったな」

「うん、一緒にやろうって言うてくれて。今ここに入れるのは花丸ちゃんのおかげが大きいかな。」

「そして善子もか。1年生は繋がりが強いんだな」

「うん！これからもずっといっしょに居られたらいいな！そしてゆうくんとも…／＼」

「俺と一緒に？可能な限りはいてあげようとは思っているけど。」

「本当の意味が分かったときに、答えを教えてくださいと嬉しいな！」

会話しながら歩いていたら、ダイヤとの待ち合わせ場所に到着していた。

「今日はありがとう！最高の1日だったよ。」

と言って、近づいてきて

「ゆうくんのこと大好き。いつか遠くへ、一緒にね。」

ってささやいてダイヤといっしょに帰っていった。

「ルビィ何言いましたの？」

「えへへ、おねえちゃんには内緒だよ。」

この会話よりも胸がなぜか痛いことが気になっていたのだった。

いつか遠くへ……か。